

日本宗教史研究 (1) 「組織と伝道」

近 江 幸 正

本書は日本宗教史研究会が昭和四十一年七月に行った研修会「日本宗教史における組織と伝道」のセミナーをふまえた仏教史研究者の論文集である。

宗教思想にせよ、あるいはいはずれの思想にせよ、それが社会に対して現実的に働きかけるためには、思想が民衆をとらえなければならぬ。しかも、それは単に個々別々に人々をとらえるだけでなくその思想を受容した人々を横につなげて、一つの共同体に結集することが必要となる。仏教における伝道と組織ということが問題になるのもそのためである。しかし、組織ということが社会一般にとって自覚的に意識されるようになったのは二十世紀に入ってからであり、宗教界においては、とくに戦後新興宗教が組織とすることを重視して勢力を伸張させたことが最大の契機に

なっている。日本宗教史研究会が最初の共同研究のテーマとして「組織と伝道」をとり上げたのもこゝに由来しているとみられ、その意味でこのテーマはすぐれて現代的であるといわなければならない。

さて、本書にまとめられているのは、竹田聰洲氏「日本宗教史を貫く素質について」、高取正男氏「奈良・平安初期における官寺の教団と民間仏教」、大隅和雄氏「聖の宗教活動」、和多昭夫氏「中世高野山教団の組織と伝道」、中尾堯氏「中世日蓮宗における組織と伝道」、藤岡大拙氏「禪宗の地方伝播とその受容層について」、北西弘氏の「真宗教団における『知識』と伝道」、千葉乗隆氏「真宗教団の組織」、松山善昭氏「近世東北における新仏教の伝播と教団形成」、森竜吉氏「一八七九年七月十四日―本願寺

教団改革の政治史的意義」の十の論文である。今こゝで各論文の内容を紹介することは到底できないが、この論集を一貫して、必ずしも各論者の問題意識に統一点が見出せないのは、とり上げたテーマが現代的であり、身延・高野山と二回にわたる合宿セミナーを経てまとめた論集であるだけに読者にとっては不満をおぼえざるを得ない。

トップに掲げられた竹田聰洲氏の論文はいわばこの論集の序論として書かれたものと思われる。竹田氏は「日本密教史を貫く素質について」という論題でつぎのように論じている。

「宗教が創造性を發揮するのは、既往の価値体系の動揺・変革あるいは喪失によって社会的危機・不安・混乱・緊張が存在する時で、それは宗教的天才・エリート思想・行動を通して実現されるものであるが、エリートである教祖の思想と実践は、社会に定着し教団の組織を生み出すことによって歴史的にその存在を確保すると同時に、反面では社会のもつ歴史的條件の不可避の変化によって、少くとも対他的には創唱当初のオリジナルな意義から遠ざかるを得ない。」

すなわち、宗教は「教団の組織と教理の伝道という両面の機能を相即させつゝ、社会を規制する反面で逆に社会か

ら規制されるという複雑な関係において宗教は歴史的に形成される」

そこで、「社会からの規制」は、日本という風土のもので「各教派・時代を通じていわば公約数的に内在する祖型乃至亜型を認知することが」できるといふ立場から、竹田氏は日本仏教を規制した「遺伝形質として、「家」と「呪術性」を仮説的に立てる。

「家」については、仏教教義は個人の救済を問題とするものであるにかゝらず、それは「家」という共同体を基底として受容されざるを得なかった。そして、幕藩制の宗教政策が「家」を基盤とする寺檀制度を作り上げたのだが「その可能条件はその政策以前にすでに『家』が内奥に一定の宗教的契機を潜在させる社会規範として広汎に存在した」。こゝから竹田氏は日本の「家」が古代・中世・近世・近代と日本の社会を基底的に規制するもので「いかなる時代の宗教も、組織的に社会の基層に永く定着するには結局この線を外すことは」できないのではないか、という問題を提出している。

「呪術性」についても、論者の視点は同様であって、現代における新興宗教の実際の機能が実は「前近代的」遡古的原始的な呪術性の復興、あるいはシャマニズムの近代的

「変容」であることをあげて、咒術性を日本宗教史の底流に潜貫するものとしている。

以上が竹田氏の論旨であるが、日本仏教の祖師方の創唱された仏教教義をその後の伝道の中で変形させた受容層の体質として、家、咒術性というものを考えていくことの重要性の指摘は確かに大切なことと考えられる。しかし、問題は、竹田氏が近代社会にも根強く残る前近代的なものを日本人の民族的遺伝形質の如く固定的にとらえるところには問題があるのではあるまいか。歴史の進歩・社会の変革の中で古いものが根強く残ることはむしろ人間の歴史の法則性であろうし、それが日本に特に著しいのは、日本の近代化が上からなし崩しになされ、民衆の側からの近代化獲得の動きが弱かった歴史的事実によるところが大きいと思われるのであって、そのことを見落して過去のあゆみを考え将来の仏教の行く道を予想するのは積極的な仏教近代化の方向を探り当てることはできないのではないか。とはいえ、竹田氏が「家」「咒術性」という、仏教定着化とそれに伴う変容のモメントを提出したこと自体は重要なことで、仏教伝道史において、この面に関する研究が今後より深められる必要は否定できない。しかし、この二つのモメントの他に、日本仏教教団の展開と伝道の歴史をふりかえ

るとき「権力」との対応の問題が重要なモメントとして考えられる必要があると思われるが、竹田氏がこの問題をとり上げなかったのはなぜであろうか。そして、権力との関連への視点が、最後の森氏の論文以外には共通して脱落している。

竹田氏の論文の外、平安中期以降の「聖」の姿を、貴族社会の解体の中で苦悩からの解放を求める知識人層の思想の投影とみて、聖の活動そのものが中世新仏教を準備したという側面よりも、聖を受けとめた知識人層の意識をクッションとして、それがさまざまな要因の連鎖反応を呼び起こすものとなったとみる大隅氏の論文、信仰と信徒の世間的行為の遊離の中に真宗教団の量的拡張が逆に信仰の低下を促した要因をみ、民衆のもつ現実主義に信心為本の立場から対決するところに伝道の課題があることを示す北西氏の論文、近代における本願寺教団の変革を教団の枠内の視点からではなく、より広く当時の社会・政治史との関連において再評価すべきことを主張する森氏の論文等は、それぞれ、伝道と組織化を考えようとする者に示唆するところのある論文であるが、われわれにより身近なものの中尾堯氏の「中世日蓮宗における組織と伝道」であろう。中尾氏は中山門流の発展を法華経寺と共通の地域的關係にあった

華嚴宗東禪寺の建武以後の凋落と比較しつゝ、古代から中世への変革の中で学解・持戒によって存立意義を主張して来た旧仏教が疲弊したのに比して、専修唱題を以て在地末端に至り教線を拡張した日蓮宗が、現実の社会秩序を支持しつゝ、祈禱・葬祭の両要素を兼ね備えて在地領主の氏寺として繁栄したあゆみを、明らかにしている。この論文は氏自身の詳細な調査を土台にしたものであるだけに、中世における初期日蓮教団が在地領主の外護のもとに教線を末端まで拡大した姿を具体的に描き出しており、その点で宗門史研究に資するところ少しとしない。しかし、千葉氏一族の権力支配を仏法の立場から積極的に支持し、その永遠を祈念することが「仏法為本」の立場に基く日蓮教団の旧仏教克服の道であったと評価する所論は、中山門流はじめ各門流が在地支配者の氏寺と化することによってその支配権を背景に在地基底部まで教勢を浸透させ得た反面、在地権力に従属しての氏寺化によって教団の規律の乱れや、宗義の退廃を招いた事実を過少評価している。

筆者が先にあげた伝道における宗教的権威と世俗権力と

の關係の重要性を見落としたことからくる欠陥がこゝにあらわれている。伝道が真に伝道となり得るためには、そのおしえが信徒の精神的支柱になるだけでなく、俗権に対する宗教の権威の優位をこの両者の緊張關係を持続しつゝ、貫徹することによって信徒の社会生活を全的に指導することできればならない。宗祖の「立正安国」の精神を「日蓮宗の信仰を維持する限り（支配者の）支配権を正当し、極めて強力な支持を与える」ものと現象的に受けとっている中尾氏の理解の仕方にも問題があり、宗祖の「立正安国」の底に、此の土を釈尊の御領とする所から導出される世俗権力の相対化と中世的支配關係の下での民衆に対する深い慈悲と、広い社会的視野があることを見落としてはなるまい。

以上の批評はともあれ、本書の中で竹田氏ものべているように教団史と教理史の分離状況をより高次な視角から統一しようとする試みは意義があり、さらに広い視点から、より多くの研究者によってそういう研究が続けられることが今日の宗教研究の重要な課題であろう。